

## 第10回 母なる信濃川 鳥のはなし

～ 信濃川河畔に集まる鳥たち～

日 時：平成18年7月20日（木）13：30～15：30

会 場：リサーチコア・マルチメディアホール（三条市）

ゲスト：渡辺 央 氏（新潟県野鳥愛護会副会長）

ホスト：鈴木聖二 氏（新潟日報社編集委員）

（司 会）

皆様、大変お待たせいたしました。ただいまより、我ら信濃川を愛する「信濃川自由大学」を開校いたします。本日はお忙しい中、ご来場いただきまして誠にありがとうございます。私、本日の司会・進行を務めさせていただきます燕三条FM放送ラヂオハートの桑原和未と申します。どうぞよろしくをお願いいたします。

信濃川自由大学は、信濃川の自然や歴史など、その魅力を広く地域の方々に知っていただくために開校し、毎回信濃川にゆかりのあるゲストの方々から様々なお話をお聞きしております。8月には源流を訪ねるツアーが開催されるため、お休みをいただきまして、翌9月は燕、その後は、新潟での開催が予定されておりますので、是非、ご参加いただきたいと思います。

なお、過去の講座に関しましては、信濃川自由大学のwebページで議事録を公開しています。お手元の資料にアドレスを記載してございますので、そちらからご覧ください。

それでははじめに、主催者を代表いたしまして、信濃川下流河川事務所長・上谷昌史よりご挨拶を申し上げます。

（上 谷）

皆様、こんにちは。ただ今ご紹介いただきました信濃川下流河川事務所の上谷と申します。本日は、この信濃川自由大学においていただき、誠にありがとうございました。

さて、この自由大学のことについてお話しする前に、皆様ご承知のように、この長雨で長野を中心といたしまして、水害で多くの方の命が奪われるということがございました。この場を借りまして、亡くなられた方へ哀悼の意を表するとともに、被災された方々にお見舞いを申し上げたいと思います。我々、河川を管理するということで、改めて水害に対して万全の態勢で臨まなければいけないということを再認識させられました。

それから、皆様方をお願いしたいと思っておりますのは、今回はたまたま長野、それから西日本の方でこういった被害があったわけですがけれども、一昨年の7.13で被害に遭われた方もおられるかもしれませぬけれども、いつこういった災害が起こるか分からないということで、ご家族の方と避難場所ですとか、避難経路を改めて確認していただければと思っております。

最初にちょっと堅苦しい話になりましたが、本日、渡辺様をゲストスピーカーとしてお迎えいたしまして、信濃川の鳥の話ということでお話を伺えるということでもありますけれども、私も大変楽しみにしております。限られた時間ではございますけれども、皆様方も楽しんでいただければと思っております。それでは、よろしくをお願いいたします。

( 司 会 )

ありがとうございました。それでは、第 10 回講座に移らせていただきます。今回の講座のテーマは、「母なる信濃川 鳥のはなし～信濃川に集まる鳥たち～」です。本日は、ゲストスピーカーに新潟県野鳥愛護会副会長の渡辺央様をお迎えしています。ホストは、鈴木聖二新潟日報社編集委員が務めます。まずは、私の方からお二人のプロフィールをご紹介します。

はじめに渡辺央先生のプロフィールをご紹介します。渡辺先生は昭和 18 年、三条市旧栄町ご出身、昭和 51 年から長岡市立科学博物館の動物研究室学芸員として勤務され、専門は鳥類の生態が中心で、これまで悠久山のサギ類集団繁殖地の調査、カイツブリやフクロウの繁殖生態などの調査、研究と合わせて、信濃川の鳥類調査、信濃川大河津分水のカモ類の調査、粟島の鳥類調査、日本海沿岸のカモメ類の分布調査などを行ってこられました。また、守門岳、粟ヶ岳、苗場山、三国峠など県内の主な山岳地域の鳥類調査も行っているようです。平成 8 年から長岡市立科学博物館館長を務め、平成 15 年 3 月に博物館を退職された後、現在は新潟県野鳥愛護会副会長として、新潟県内のカワウの生息分布調査などを行っていらっしやいます。

続きまして、鈴木聖二編集委員のプロフィールをご紹介します。昭和 29 年石川県金沢市ご出身、昭和 51 年新潟日報社に入社し、本社報道部の経済、県政、新潟市政記者クラブ、長岡、東京支社などで取材記者として活躍なさいました。その後、報道部デスク、編集委員兼読者文化センター、情報文化部部長代理などを経て、現在は編集委員兼情報文化センター情報文化部部長を務めていらっしやいます。渡辺央先生、鈴木聖二編集委員のプロフィールを私の方からご紹介させていただきました。それでは、渡辺先生、鈴木編集委員をお迎えいたします。皆様、大きな拍手でお迎えください。

それでは、ここからの進行は鈴木編集委員をお願いいたします。どうぞよろしくお願い申し上げます。

( 鈴 木 )

ご紹介にあずかりました鈴木です。本日は皆さん、ようこそお越しいただきました。今ほど上谷所長から水害のお話がありまして、ちょうど 2 年前の今ごろのことを、ここ数日のニュースで思い出された方も多いのではないのでしょうか。こんな時に鳥の話と、のんきなことを言っていると感じになるむきもあるかもしれませんが、私は思うのですけれども、やはり自然の姿、川には鳥だけではなくて植物もあれば、魚もあれば、いろいろなものがあるし、そこで文化も育まれている。それをストレートにというか、きちんと見ていくことは、長い目で見れば防災の視点にもつながってくるのではないかなど。どんなふう川に生態が保たれているのかを知ることは、川を守っていくこと、川から生活を守るといふことと決して無縁ではないという気持ちで、今日はここに座っています。今日、川の多様な自然の中で鳥という、ある意味では川を利用しながら自由に飛び回っている生き物のお話をさせていただきたいと思います。それを知ることによって、いろいろな川に対するイメージも広がるのではないかなと思っています。もう 40 年以上にわたって野鳥と付き合っていて、信濃川を中心に鳥の生態に精通されている先生をお迎えしてお話を伺えるというのは、私自身も楽しみにしています。

まず、今日のお話の主役である信濃川の鳥たちを映像とともにご紹介いただけますでしょうか。

( 渡 辺 )

渡辺でございます。今ほどご紹介いただきましたように、私、現在は三条市になりましたが旧栄町の生まれでして、そこから 30 年間、長岡の科学博物館に勤務しておりました。信濃川でいいますと、今日担当されます下流事務所の管内から、長岡の中流域の方に 30 年間ずっと通っていたということ

でございます。従いまして、鳥はどちらかと言うと、勤務先のある長岡を中心にしました中流域の鳥を見てまいりました。そんなことで今日、信濃川の鳥の話、私は話の方は本当に苦手です、隣の鈴木さんにご迷惑をおかけするかもしれませんが、よろしく願いいたします。

本日の主役のいろいろな鳥の話が出てまいりますので、その前に、どんな鳥かというのを紹介しようと思います。ここにスライドを用意しました。信濃川に集まる鳥たちのほんの一部ですけれども、信濃川を語るときに外せない鳥を紹介していきます。

また、今ほども話がありましたように、昨日から信濃川が大変増水しておりまして、長岡の方も午前中に行ってまいりましたら、河川敷の上に水が上がっておりました。もうそろそろ繁殖も終わったかなと思いますけれども、例えばコアジサシですとか、チドリの仲間は河原で繁殖しています。そうすると、この増水によりまして、もし、まだ飛び立たないヒナがいたり、卵だったりした時には全滅するわけです。そういうものを繰り返し繰り返しやってきているというのが、信濃川ばかりではないですが、河川に生息する鳥なのです。そういう環境にずっと生息してきているということで、最初、この鳥を紹介しまして、その次に、川の鳥というのはどういう特徴があるのだ、みたいなことをお話ししようかなと思います。まず最初に、鳥の方を紹介してまいります。

最初に出てまいりましたのが、ホオアカという鳥です。信濃川の鳥というとき皆さんはすぐ水鳥を思い出されると思います。サギですとかカモですとか、そういう水鳥を思い出されるかもしれませんが、信濃川の鳥あるいは河川の鳥という時に、流れのある水の中といたしますが、河川そのものに生息あるいは餌を捕りに来ている鳥もいますし、河辺いわゆる河川敷と言われるところに入ってくる鳥もいるわけです。それらを全部合わせて、信濃川の鳥とか五十嵐川の鳥とかという話になります。今、最初に出てきましたのは、ご存じのようにスズメのような形ですので、河川敷の方にいる鳥です。ホオアカという、ほっぺたが赤いからホオアカといって、非常にきれいな鳥です。かつては妙高高原ですとか尾瀬ヶ原ですとか、高原にすむ鳥と言われていました。それが信濃川に生息しているというのが分かって、われわれのような鳥の調査をしている者は、みんな驚いたものです。そういう鳥です。

これは、河原の方にいる鳥です。さっきのホオアカは堤防だとか河川敷にいる、草地性の鳥でした。今度は河原にいるチドリの仲間です。上の方がコチドリ、下の方がイカルチドリ、同じチドリですけれども、コチドリの方がちょっと下流域の方、イカルチドリの方は中流域にいる、よく似たチドリの仲間です。



次に、3種類出てきましたがセキレイの仲間です。皆さんもよくご存じかと思います。川に行くと必ずいるし、川ばかりではなくて、みなさんの家の周りにもよく来ていると思います。ハクセキレイ、セグロセキレイ、キセキレイの3種類です。これはまた後で話をする時に出てまいりますので、こういう代表的な3種類のセキレイがいることを覚えていて下さい。川の鳥というとセキレイは必ず語らなければならないと思います。

さっきのホオアカと同じ仲間のアオジという鳥です。これは、この三条周辺にはちょっといないかもしれませんが、長岡の河川敷が中心です。信濃川の中でも長岡、大河津分水くらいまで入ってきているかもしれませんが、これも信濃川を代表する鳥です。

そして、今、川に行くと必ず聞こえてくる鳥のさえずりが、オオヨシキリです。“ギョギョシギョギョシチャチャチャチャ”と盛んに鳴いていますが、そろそろ鳴き声がなくなってきました。というのは、繁殖がほぼ終わってきたということです。5月から盛んに渡ってきて鳴きます。

これが、オオヨシキリとちょっと違っていて、オオヨシキリの仲間ですが、コヨシキリといえます。これはオオヨシキリよりも分布している場所が少ないです。長岡から大河津分水にかけての中・下流域にいます。オオヨシキリよりももっとリズムカルで、本当にすばらしい鳴き声です。また後で話をしますが、激減しております。

これは皆さんご存じのヒバリです。今出てきているのは、どちらかと言うと草地にいる鳥が出てきております。その代表的なヒバリです。



これもそうです。キジです。河川敷の草地を代表する鳥です。

これが冬になると入ってまいりますオジロワシです。新潟県に12～13羽毎年入ってきます。飛来地としては北海道が有名です。流氷の上に止まっている姿がよくテレビに出ますが、スケトウダラの漁の時に網からこぼれるスケトウダラをねらって、こちらのトビなんていうものではない、もっといっぱい流氷の上に止まっています。流氷とワシで有名なオジロワシです。日本でも最大級のワシです。北海道の一部で繁殖していますが、ほとんどは北海道以北、カムチャッカですとか、それより北で繁殖して、冬になると流氷とともに南下してくる。そして、オホーツク海で越冬します。その中の一部かどうかわかりませんが、何羽かが本土まで入ってきます。新潟県には12～13羽が平均して入ってきています。そのうちの半分以上は信濃川に入ってきます。信濃川の大河津分水から十日町上流の宮中ダムというところにかけて見られます。それから魚野川にも入ってきます。これも後で地図にも出てくると思いますが、信濃川を特徴づける鳥の一つです。

これもオジロワシです。錦鯉を捕まえて食べようとしているところですが、魚やカモを食べていますが、どちらかと言うと魚を主食にしているワシです。

この図を見ていただくと分かりますように、新潟県のオジロワシが入ってくる主な場所です。脇の方にずっと地名が書いてあります。14か所ぐらいがオジロワシが毎年入ってくる場所なのです。ちょっと見ていただくと分かりますように、転々と信濃川沿いに入ってきているという形になっております。あとは福島潟ですとか、あるいは佐渡の国仲平野に入っておりますが、信濃川の上流の方まで転々と入ってきます。三条の方はご存じでしょうけれども、五十嵐川にも入ってくるようになった。これは近年だと思いますが、その辺の話はまた後でしたいと思います。



キジ(草原性の鳥)



オジロワシ



オジロワシ(長生橋上流)

高橋 勉氏 所蔵



そして、やはりこういう大型の鳥を数多く迎え入れられることができるのが信濃川の特徴です。これはハクチョウですけれども、五十嵐川にも入ってきます。

そちらの写真にもありますが、ムクドリという鳥です。ちょうど今時分からです。大群になってまいりますが、何万という大群が信濃川の河川敷の柳の木の中のネグラに入るところです。夕方の情景です。こういう情景が毎日毎日繰り返されるわけです。これだけの数の鳥を信濃川は迎え入れる。なぜ信濃川が迎え入れるのか、他のところはというと、例えば長岡の駅前にムクドリが1万羽も集まって大騒ぎというのがありまして、追い出し作戦に私もかかりました。長岡駅前の30本や40本の木では、これだけの鳥を抱えきれないわけです。ところが、これが同じような数で信濃川に行けば、信濃川では誰があそこにムクドリがいるというのが分からないくらい静かに迎え入れるのです。それだけ懐の深い自然を信濃川が持っているということです。

カモも下流域から長岡にかけて、冬になりますと、1万からのカモが集まってまいります。これだけ大量の数のカモが来るといわけです。

これは、下の方がゴイサギ、上の方はアオサギで、これは悠久山です。後で話が出てまいりますので、次お願いします。

これがその時の悠久山の状況です。サギを追い出して信濃川の方に移した時の状況を、ちょっと入れていただくかなと思ひまして、出してきました。

これが信濃川に全部移ってきた時です。悠久山から信濃川にゴイサギが全部移動して、信濃川に入ってきた情景です。



コハクチョウ(長生橋上流)

コハクチョウ(長生橋上流)

コハクチョウ(長生橋上流・後ろは東山)

高橋 勉氏 所蔵

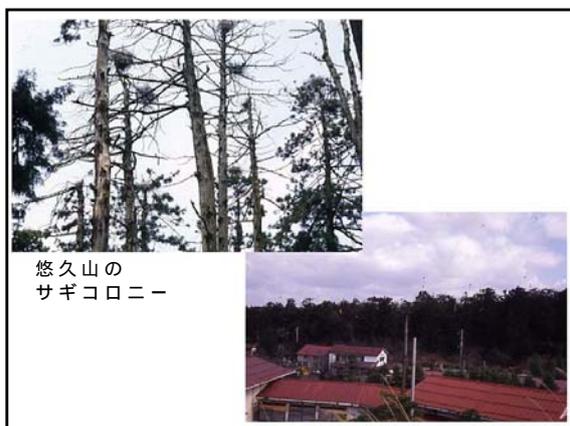


ムクドリ(大手大橋下流)

高橋 勉氏 所蔵



マガモの大群 (長岡)



悠久山の  
サギコロニー



アオサギ (悠久山)

ゴイサギ (悠久山)

川の中にもしサギがいなかったら、この川を見られた時にどうでしょう。たった1羽、鳥がそこに入ってくるだけで、川の情景が変わってまいります。そういうようなことで、一つだけ入れたのがこの写真です。コサギが1羽止まっています。

(鈴木)

今さっと主役クラスをご紹介いただいたのですが、それだけでも20種類くらいの鳥が写真に登場しました。信濃川でこれまで観測された、もしくは日常的に観測できる鳥の数は全体でどのくらいの種類がいるものなのですか。

(渡辺)

国の方で5年に1度の水辺の国勢調査を行なっています。信濃川の鳥を調べているのですが、あれですと165種類出てくるのです。多い方です。全国の河川のものを全部見ておりませんが、阿賀野川以上に多い、黒部川等に比べてみましても、非常に多い数です。あるいは20年くらい前に長岡野鳥の会が20周年を迎えた時に見たものだと209種類くらいが十日町から河口までの間に出ています。長岡の地域だけで調べますと、約60から80種くらいが1年間に出てくる。そして、大河津分水で1年間、与板町の小林さんという方が調べておりますが、95種類出ているのです。1年間に95種類の鳥が出てくる場所というのは、そうないです。それだけ大河津分水というのは鳥の多いところということです。

(鈴木)

信濃川が長さで日本一ということは誰でも知っているわけですが、その日本一であることにふさわしくというのが、鳥の種類でも圧倒的に日本一の豊富さを誇っているということなわけですね。4月に新潟大学の本間先生が魚の話をしてくださったのですが、信濃川というと大河のイメージがあるのですが、魚の種類を全部数えても130種類くらいしかないそうです。だから、水の中だけで生きている魚と比べても、信濃川に生きていると言っていいのか、観察できる鳥の数がそれだけ多いということなわけですね。今の先生のお話の中でも草原性とか水辺とか、いろいろな特徴のお話がありましたけれども、五十嵐川も含めてですけれども、信濃川というのは、鳥が暮らす場所としてどういう特徴を持った川なのかということをお話ししていただけますか。

(渡辺)

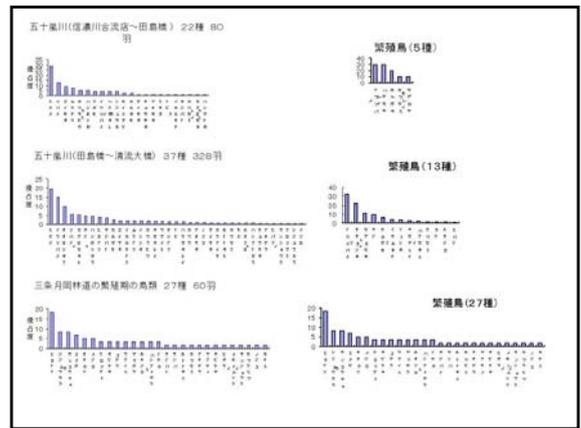
信濃川の鳥、あるいは五十嵐川の鳥ということだと百数十種類というような形で出てまいりますけれども、いわゆる河川の鳥というのは、どんな特徴があるのかということをお話しして説明させてもらおうと思います。

今日は三条ということもありまして、五十嵐川の鳥を載せてございます。五十嵐川というのは私の地元なのですが、五十嵐川の鳥は見たことがありませんでした。たまたま機会がありまして昨年、年に4回くらい、信濃川の合流点から下田の入り口のあたりまで、いわゆる清流大橋の上の方になります。三条の方はよくご存じだと思いますが、初めて見せていただきました。ちょうど7.13水害の復旧工事が盛んに行われるちょっと前の五十嵐川の状態なのです。面倒くさいようなグラフが並んでいますが、これは何のことはないのです。五十嵐川をずっと歩いて、数の多い鳥から順に並べてあります。下の方に鳥の名前がずっと書いてありますが、数の多い順に並べてあります。五十嵐川の上の方のグラフは下流の方になるとは思います。田島橋から信濃川の合流点までになります。それから



コサギ (長岡市)

次のグラフは田島橋から上流の方、清流大橋までの鳥をずっと並べてございます。鳥の種類は、ご覧になって分かる通り、田島橋から上流の方が多いです。田島橋から上流の方には 37 種類で 328 羽。田島橋から信濃川の合流点までは 22 種類で 80 羽ということです。田島橋から清流大橋までの中流域といいますが、上流の方に非常に多くの種類が出ています。五十嵐川でこれだけ出るとは思いませんでした。



こういう形で種類を羽数の多い順に並べて比べてみます。観察される種類は結構多いのですが、そこで実際に

生息や繁殖している鳥、五十嵐川にしっかりと結びついて、そこで子育てをしている鳥はどのくらいかと言うと、田島橋から下流の河口付近までの間では、セグロセキレイですとかカワセミですとか、カルガモとかハクセキレイ、イワツバメなど5種類ぐらいしか出てこない。37種類も出た田島橋から清流大橋の間も生息、繁殖している鳥は13種類くらいです。しかも羽数をみると田島橋だったか渡瀬橋の下で集団で繁殖しているイワツバメと、ヨシ原で繁殖しているオオヨシキリが非常に多くて、あとはそれほど数は多くないということです。だから、川というのは繁殖している鳥の種類は少なく、個体数が多いという、いわゆる環境が不安定なところの鳥相です。例えばヨシばかり生えているようなところになりますと、オオヨシキリが断然多くなる。そうすると、田島橋から清流大橋までは37種類も出ているけれども実際に繁殖している鳥は13種類です。あとの24種類は五十嵐川の中で何をしているのだということです。つまり繁殖している鳥だけではなくて、餌を捕りに来たり、水を飲みに来るものもいるでしょうし、ねぐらとしての鳥もいます。そういう鳥が全部で37種類ということです。このような川の鳥と比較してみるために、三条の同心坂の上のところの月岡林道で山の鳥を調べてみました。それが一番下のグラフです。調べたのは、たった1キロの間です。この三条の月岡林道は、新潟県の中でも本当に種類の多いところだと思います。調べてみると、27種類で60羽くらいしか出てこない。つまり川とは逆に種類数が多くて、個体数はそれほど多くない。しかも全部ヒヨドリがちょっと多くなっていますが、他の二十数種類は全部同じくらいの個体数しか出てきません。これが繁殖している、本当にそこに適応して生息している鳥です。ヒヨドリ、シジウカラ、サンコウチョウ、エナガなど出現した鳥は全部あそこの環境で繁殖している鳥なのです。そうすると、五十嵐川で繁殖している鳥よりも遥かに多い鳥が生息しているといえます。だから、河川の鳥というのは生息しているというよりも、利用している鳥が多いということです。鳥の1年間の生活の中で信濃川を利用する、五十嵐川を利用する鳥が非常に多いということです。利用する種類数が多いということは、信濃川がそういう環境を河辺を含めて持っているということです。

これはさっきのセキレイです。これを出してきましたのは、五十嵐川の鳥を調べた時に、いい川だなと思ったのです。それは、下流域にはハクセキレイが多く、だんだん上に行って中流域に入るとセグロセキレイの世界になってくる。さらに下田の方まで入って上流域に入っていきますと、キセキレイに変わってきます。田島橋から下流のあたりを見ると、ハクセキレイが非常に多い。そして、中流域に入るとセグロセキレイが多くなり、上流に行くとキセキレイが多くなる。いわゆるいるべき環境にいるべき鳥が、しっかりといる川ということで、五十嵐川はいい川だと感じたのです。ハクセキレイというのは、夏は新潟県にいなかったのです。冬鳥だったのです。顔が白黒のセキレイです。こ

うちのセグロセキレイもそうです。極めて近い仲間です。ハクセキレイは北海道で繁殖していたのです。それが昭和 30 年代に入って、だんだん東北に入りまして、それから新潟県に入って、今では日本列島のずっと南の方まで繁殖しております。だから、ハクセキレイは昭和 30 年代前半くらいには、まだ新潟県には繁殖していなかった。それが昭和 38 年くらいに入ってきて、今ではどこでも見られます。ハクセキレイが入ってくる時に、まず、日本海側の海岸沿いに入ってきて、それから川づたいに内陸の方に入ると言われております。しかもその足がかりになるのが、工場ができたとか、あるいは砂利の採取場が川の縁にできたとか、そういう構築物ができていくのに従って、だんだんと分布を広げると言われています。だから、上流の自然ばかりのところにはあまりいないのです。今一番分布が広がっているのがこのハクセキレイです。川には 3 種類がそういう形で分布しているということで、子どもさんたちの総合学習をやる時に、近くの川のセキレイの分布を見てみたらおもしろいのではないですか、とよく言います。誰でもが分かる鳥ですので、ぜひやってみてください。セグロセキレイは日本特産種です。日本にだけいる顔の黒いセキレイです。こっこの顔の白いハクセキレイが中流域のセグロセキレイのすみ場所にだんだん入って行きます。どうなるでしょうか。誰が見ても分かる鳥ですから、五十嵐川で調べられるとおもしろいかもしれません。



ハクセキレイ(河川をすみ分けるセキレイ=下流) セグロセキレイ(河川をすみ分けるセキレイ=中流)  
キセキレイ(河川をすみ分けるセキレイ=上流)

りになるのが、工場ができたとか、あるいは砂利の採取場が川の縁にできたとか、そういう構築物ができていくのに従って、だんだんと分布を広げると言われています。だから、上流の自然ばかりのところにはあまりいないのです。今一番分布が広がっているのがこのハクセキレイです。川には 3 種類がそういう形で分布しているということで、子どもさんたちの総合学習をやる時に、近くの川のセキレイの分布を見てみたらおもしろいのではないですか、とよく言います。誰でもが分かる鳥ですので、ぜひやってみてください。セグロセキレイは日本特産種です。日本にだけいる顔の黒いセキレイです。こっこの顔の白いハクセキレイが中流域のセグロセキレイのすみ場所にだんだん入って行きます。どうなるでしょうか。誰が見ても分かる鳥ですから、五十嵐川で調べられるとおもしろいかもしれません。

(鈴木)

先生、それを上中下流ですみわけるとするのは、食べ物か何かの関係ですか。

(渡辺)

食べ物は、おそらく川の中のカゲロウですとか、そういうものが主食になっているのです。ハクセキレイはどちらかと言うと、街の中の下水のようなところにもいて、そこではユスリカだとか、そういうのを食べています。セグロセキレイというのは、どちらかと言うと中流域で川に密着しているセキレイです。問題は、開発などによりハクセキレイがセグロセキレイの領域にも入ってきて、同じ餌を食べて同じ生活をしていることになる競争になってくるわけです。今まではハクセキレイがいなかったからセグロセキレイの天下だったけれども、そこにハクセキレイがどんどん侵入してきて、信濃川や五十嵐川の中流域にいたセグロセキレイがだんだん駆逐されて、いなくなる懸念があります。その辺を私も頭において調べたりすることがありますけれども、例えば村上ですとか県北の方では、ほとんどハクセキレイばかりになってもいいのではないかという気もしますけれども、ただ、新潟市のあたりとか街の中を見たら、ほとんどハクセキレイです。信濃川の河口付近には、セグロセキレイはほとんど入っていない。セグロセキレイが出てくるのは、信濃川をずっと登って行って、長岡市あたりからハクセキレイと共に出る数が五分五分になってきます。十日町のあたりに行くと、圧倒的にセグロセキレイが多くなります。川の鳥を学習材料としましてもおもしろいし、川を考える上でもおもしろいと思います。全部駆逐されているかと言うと、セグロセキレイの方が喧嘩すると強いとも言われていますので、その辺、分かりませんが、しっかりと上中下流に結びついている鳥がセキレイです。

(鈴木)

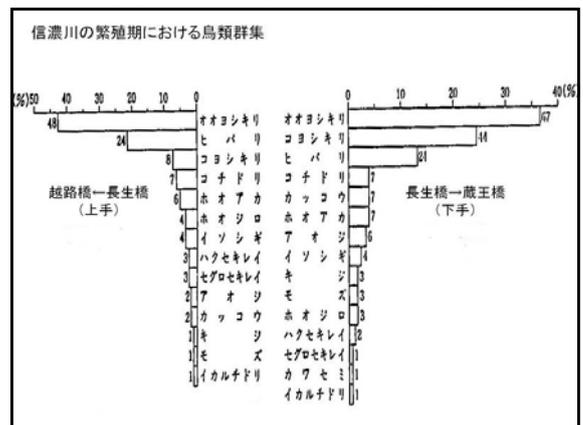
山と川との比較の話はおもしろいですね。人間社会に例えると、川はどちらかと言うと都会的イメ

ージですか、定住しているというよりも、いろいろな人が食事に来たり飲みに来たり、遊びに来る鳥はあまりいないのかもしれないですけども、休憩しに来たりする、流行の言葉で言えば交流人口が多いと言えいいのか、そういう鳥たちがいろいろなところから、そこを多様な使い方をするために集まって来る場所が川だというお話だったのかなという感じがします。それに比べれば、山の方は住宅地というか、きちんとそこで暮らしている鳥たちが中心で、山の鳥も川へ下りてきて餌を捕ったり、水を飲んだりということも当然あるわけですか。

(渡 辺)

今出てきました山の鳥のサンコウチョウですとか、ああいう林の中、いわゆる樹林性と言いますけれども、山の中にすんでいる鳥が信濃川に出てくるということは、ほとんどないです。そして、今おっしゃったように、さまざまな利用の仕方でも鳥が集まってくるという、まさにこれが川に鳥が多いということで、今も紹介しましたが、本当にこの川にすみついている鳥そのものというのはそんなにいないのです。日本には鳥が550種類ぐらいおりますけれども、その中で河川にしっかりと結びついて、河川が生息域だというのは3%くらいです。15、6種類程度です。日本の鳥の中で一番多いのは、やはり山にいる鳥、樹林性の鳥なのです。そういうことで、河川に結びつく鳥はそんなに多くないですけども、じゃあ、なぜこれだけの鳥がいるのかというと、さっき言いましたように、利用する鳥が多いのです。繁殖のために利用する鳥、あるいはねぐらのために利用する鳥とか、あるいは越冬のために利用する鳥、それが鳥が多いというポイントだと思います。

今の話で、山の鳥がこちらの方に来たりするのかということですけども、2、3日前ですけども、ある新聞に小説の連載が始まるということで、その抱負みたいなのが新聞に載っていたのです。川が極めて重要な小説の中のテーマになっているらしいのです。それは、松浦寿輝さんが今度新しく連載を始められる父親と子ども2匹のネズミ一家が、川の上流を目指して安住の地を求めて旅をするという物語らしいのです。その間にいろいろ川とのかかわり、あるいはいろいろな人とかかわりみたいなのがテーマの元になっているみたいなのですが、こうおっしゃったのです。川は自然から文化に向かって流れてくるのだという話だったのです。これを見ましたときに、私たちは上流、中流、下流、あるいは河川形態が上流はどうで、こういうような話ばかりになるのですが、なるほど自然のところから文化に向かって流れてくると、それを思いましたときに、例えば十日町の上流にすんでいる鳥、カワガラスとかヤマセミですとか、キセキレイですとか、あるいはセグロセキレイもそうかもしれませんが、数えるぐらいしかございません。そして、下流へ川が流れて文化圏に入ってくると、カラスとかスズメですとか、あるいはムクドリですとかキジですとか、こういうのが出てくるわけです。これは一つは人間の生活の中に入ってくる鳥です。例えば河川敷に田んぼや畑が作られるという中に、初めてムクドリだとかスズメだとか、カラスだとかトビだとかが入ってきて、これらの鳥が上流の方に向かうというのはあまりないし、上流の鳥が下流に向かってくることはあまりない。そうすると、ちょうど自然圏から文化圏に川が流れるように、鳥の分布も中流域のあたりが自然に強く結びついているような鳥と、それからもう一つは文化圏にいっぱいいるような鳥が混じり合っているのが、ちょうど中流域の長岡周辺にあるのかなと思いました。カワガラスが長岡の長生橋付近ですとか、中流域まで見られるということは、まずないです。長い間見ていても、カワガラ



スあるいはヤマセミが来るというのはありません。ただ、ハクセキレイみたいに文化圏にすんでいた鳥が、自然圏に向かっていくというのは割合にあるという気がします。アオサギは下流域にいっぱいいますけれども、山の方にも行ってみたりする。それはネズミの話のように、文化圏から自然圏に向かうのはいるかもしれないけれども、自然圏から文化圏の方に下りてくるものはない。だから、自然圏の方の環境が壊れたりすると、まずそちらの方の鳥がだめになるかなと、こういう気がしたのです。

(鈴木)

鳥も人間と混じった方が、ずうずうしくなって強くなるということなのではないでしょうか。守るのであれば、自然圏にいる鳥の環境をきちんと守ってあげないとということですね、それは必然的に代替は利かないということになるわけですね。

先ほど先生のお話を伺っていて印象的だったのは、川で観察される鳥というと水辺の鳥とか、水鳥とかというイメージが何となくあったのですが、草原性の鳥というのが何回か出てきました。草原性の鳥というのが信濃川で増えてきているのですか。

(渡辺)

先ほど紹介しましたホオアカですとかアオジですとか、コヨシキリですとかオオヨシキリ、あるいはヒバリ、これらの鳥が草原性の鳥と言われるのです。新潟県の中に草原という環境はあまりないですよ。例えば火山性の草原といって火山がある山の裾にずっと広がっている、阿蘇とかへ行くと草原というのが出てきますけれども、新潟県にはあまりない。妙高高原に行くと、スキー場などに広がって来るというのがありますけれども、あまりないのです。草地を好みます鳥、あるいはそういうところで子育てをする鳥のことです。このような鳥が、先ほど話をしたみたいに、信濃川に多いのです。それを、17、8年前に1回調べているのです。最初に話しました、ホオアカというのは図鑑を見ましても、ほとんど高原の鳥と書いてあります。それで、高原にいるのだらうと思っていたのですが、大河津分水に行ったら大河津分水にいる、しかも長岡へ行ったら、私はその時はまだ長岡にいなかったのですが、長岡の方の河川敷にはホオアカもいるけれども、アオジも繁殖しているという話になったのです。それは違いうらう、まさかアオジが平野部の河川敷にいるということはないだらうと思ったら、長岡にアオジがいるのです。そして、コヨシキリという鳥もそうです。ヨシがあればいるというオオヨシキリとはちょっと違って、県内ではコヨシキリはあまりいないのです。それが1980年頃には本当に多かったものです。長岡の長生橋から今の大手大橋、それから長岡大橋にかけて本当に多くコヨシキリがいたのです。それもお手元の資料の中の図にグラフになって入っていると思いますが、信濃川で繁殖している鳥ということで入っていると思います。それをご覧になっていただくと分かりますけれども、オオヨシキリと並んでコヨシキリの数が非常に多いですよ。私は信濃川の鳥を語る時、今挙げた4種類ぐらいの草原性の鳥の動向というのに注目して話をします。これが中流域を非常に特徴づけるし、あるいは信濃川を特徴づける鳥だからです。というのは何かと言うと、他にいないということです。例えば五十嵐川へ行って調べてみても、ホオアカだとかアオジだとか、ヒバリはいますけれども、コヨシキリですとかという鳥は入ってきていない、五十嵐川にはいないのです。そうすると、この草原性の鳥が入ってくる要素は何だらうということで考えていくと、信濃川の堤防に広がる草地や広い河川敷などの環境が一つ浮かび上がってきます。これらの鳥は阿賀野川にもいます。

草原性の鳥がすむということはどういうことだらうと考えるのです。そして今、鈴木さんの方から問いがありましたが、その数はどうなっているかということですが、これが減っているのです。20年後に調べてみたら、ホオアカは20年前、1980年に調べた時は、大河津分水路の河口近くにあ

る渡部橋から小千谷の旭橋までオスの数だけで 62 羽、オスがさえずっているということは縄張りを持って、メスとだいたい一緒になっているということです。だから、繁殖しているつがい数が 62 ぐらいということ。20 年後に同じような形で信濃川のホオアカの調査をやってみました。数が少なくなっているというのは分かっていましたけれども、さえずっていたオスの数は 10 羽でした。そういう状況です。それから、コヨシキリは長岡では 40 羽、50 羽といたのが、今は 10 羽いない、そのぐらいの状況になっているのです。ところが、環境がそれほど変わったのかと言いますと、これほど激減するほど変わっているようには見えません。ホオアカが減っているのは、先ほども控え室の方で話をしていましたけれども、堤防の草地に繁殖する鳥で、草の中に巣を作るのです。そして、5 個か 6 個の卵を産んで、6 月くらいにヒナが出るのです。7 月くらいにずれ込むのもありますが、この時期にちょうど堤防の草刈りが行われます。これが、ホオアカにとっては極めて脅威なのです。それで、今ホオアカはどこにいるかと言うと、河川敷の堤防の草地よりも休耕田ですとか、あるいはスキー場の草地ですとか、むしろそちらの方に多くなってきているのです。堤防の草刈りだけが原因で、ホオアカがそちらの方に移ったのかなという疑問もありますけれども、ただ、コヨシキリだとかホオアカの数を見ても、この激減の原因が何かと注目していかなければならないし、今後信濃川という環境を見ていく時に、特に注目して見ていかなければならないのがこれら草地性の鳥だと思っているのです。

( 鈴 木 )

先生、今のお話で、草原性の鳥がすめる環境が信濃川にあるというお話でしたが、それは具体的に言うとうとうことなのですか、五十嵐川にはなくて信濃川にある条件というのは。

( 渡 辺 )

一つは河川敷の広さです。五十嵐川にはそれだけの広さがないということでしょうね。ただ、道心坂の下あたりにはかなりのヨシ原がありますから、あのくらいのところになると入ってきてもいいと思いますが、ただ草地ばかりあればいいのかと言うとそうではなくて、畑ですとか荒地ですとか、あるいは柳の木がポツポツ生えているとか、そういうところをまた好むのです。だから、今、信濃川に六十何羽いたと言いましたけれども、どこにでもいるというのではなくて、いる場所にはいるという形なのです。いる場所というのは何かと言うと、草ばかりのところよりも畑がちょっと入ってきたり、あるいは荒地地みたいなのが入ったり、凸凹がある方がホオアカがいるということです。そういう環境要素を持った河川敷を中流域の信濃川が持っているということだと思います。

( 鈴 木 )

確かに信濃川は広いのはもちろんですし、見ていると、本当にりっぱな中州、中州と言うにはちょっと失礼に当たるような、砂州ではなくて森ようになった中州もあれば、大河津のあたりに行くと、堤外地の非常に広い耕作地もありますし、時にはグランドになっているところもありますし、非常に多様な環境を飲み込むだけの容量がある川だということですね。その条件がどう変わっているのか、今の草原性の鳥の数の変化とどういにかかわりがあるのかというあたりは、長岡の話であれですけれども、長岡市内の日赤病院とかいろいろな商業施設が集まっているゾーンというのは、昔は河川敷地だったですよ、ああいうところも鳥にとっては非常にいいところだったのですか。

( 渡 辺 )

まさに鳥の天国のようなところでした。今、あそこは日赤があつたりいろいろありますが、あの辺は全部ヨシ原で湿地がありまして、鳥の多かったところ。信濃川で何千羽というサギが繁殖していました。

(鈴木)

あそこはわざと堤防の一部を切って、そこから洪水時には水が入り込んで、いわば遊水地のような場所でした。今は長岡のまちづくりの中で非常に拠点的な地域になっていますけれども、かつてはそういうエリアだったわけですね。それを高度成長期に地元出身の偉い政治家がいろいろいきさつがあったようですけれども、それを閉めきって埋めたてて陸地化して、長岡の副都心という形で開発、最終的には長岡市と半分ずつ分けることになりましたが。今、河川行政というか、治水に対する考え方も変わって行って、溢れさせるような遊水的な機能を大切にしようということで、ああいったやり方というのが若干見直されていますよね。そういう遊水地的スペースは鳥にとっても非常に貴重だったわけです。かつての河川行政の流れの中で、草原的な多様な機能というのが失われたという可能性はありますよね。

(渡辺)

一番変わってきたのが、河川敷の乾燥化だと思うのです。今お話になったように、昔は河川敷の中に水溜まりがあったり、あそこで魚釣りをした人は多いと思うのです。今日日赤の建っているあの辺ですね。私も博物館にいた時に、サギの調査で毎日のように通いましたけれども、中州にサギが繁殖しているのですが、そのサギの一つ一つの巣の中に何個卵を産んでいるかというのを、全部で330から350くらいの巣を調べるわけです。今日は1卵目が孵化した、2卵目が孵化したというように。だから、何個卵を産んで、何個そこからヒナが出て、何羽ヒナが巣立っていったというような、いわゆる繁殖成績をみていました。そんな調査で信濃川に行く時には、腰のあたりまで水に浸かりながら木の1本1本を調べたものです。その時に水をジャブジャブございていくようなところに、バンですとかヨシゴイですとかという水鳥がいるわけです。そういう湿地にいる鳥が、まずいなくなったということです。今言った堤防の草地そのものはずっとあるかもしれませんが、湿地がなくなった。それはやはり今日はこうやって大水が出ておりますけれども、今は河川敷まで水が上がることは少なくなって、だんだんと乾燥してきて湿地がなくなってきたという変化があります。

(鈴木)

川だから波打ち際というのは言葉がおかしいかもしれないですけれども、そういう空間、特に信濃川のような大きな川の場合は少ないですね。例えば悪いかもしれませんが、最近、秋田でお母親が娘と隣の男の子を殺したという事件で、川の映像がよく映るのですけれども、あの程度の中規模ぐらいの川だと、自然の川辺が保たれていて、そんなところに感心してはいけなないのかもしれないですけれども。信濃川の場合はメインの大河ということで、万が一のことがあったら大変だということもあるのでしょうけれども、がっちりと固められた場所が多い。護岸等でもなだらかに、だんだん乾燥地から少し低い1週間に1回水に浸かるところ、3日に1回浸かるところと、次第に水辺に入っていくというような空間があれば、より多様な鳥が住めるのではないかという気がします。

(渡辺)

植物の方では、水際から冠水の程度によって毎年水を被っているようなところの、不安定帯の植物と、1年に数回程度水を被るようなところに出てくる半安定帯の植物、そして、数年に1回くらいしか冠水しない安定帯の植物というように、植物では不安定帯、半安定帯、安定帯と分けています。安定帯にはオニグルミだとかエンジュでなどが大木となつてがうっそうと茂っているわけですが、長岡の河川敷はそういう林が多くなったということです。大きなオニグルミの木が、ここが河川敷かと思うような林になっておりますけれども、あそこは昔はヨシ原だったのです。水が被っているような不安定帯がなくなってきたのでしょね。

( 鈴 木 )

乾燥化と言えはいいのか、中間領域がどんどん減っているということですね。

ちょっと話が戻るのですけれども、さっきセキレイのすみわけの話がありましたけれども、ハクセキレイが外来というか、北からの外来種みたいなのが、従来からすんでいるセグロセキレイのところを荒らしていくという、魚の世界では外来種のブラックバスがどうこうという話がよくありますが、鳥の世界でもそういったことが問題になっているのですか。

( 渡 辺 )

ハクセキレイの場合は少し違いますけれども、外来種問題は、今、魚が非常に問題になっておりますけれども、鳥の方は魚ほど深刻な問題になっているのは出てきていないようです。これは地域によりますけれども、関東だとか関西の方ではソウシチョウですとかガビチョウですとか、あるいは東京で有名なワカケホンセンインコが 200、300 の群れになって東京都心を飛んでいるようなのがよくテレビに出てきます。ああいうのはありますけれども、あまり深刻な問題になっていません。外来種が問題になってくるといのは、例えば、魚の方ではブラックバスが問題になってくるのは、ブラックバスが入ることによって影響が非常に大きいということです。従来、日本にいる例えばタナゴですとかフナですとか、どんどんいなくなってしまうわけです。だから、ブラックバスが、外来種だからどうこうということよりも、その影響が極めて深刻だということが問題になってくるのだと思うのです。そういう面では鳥の方ではあまりないのですが、たった一つ、カイツブリという鳥、皆さんご存じかもしれませんが、池にカイツブリという鳥がいますが、水の中によく潜る、ハトぐらいの大きさの代表的な水鳥です。そして、よく短歌に詠まれています。琵琶湖は二オの湖と言われるぐらいに、カイツブリが多い湖として有名です。この鳥を私は7年間くらいずっと調べたことがあるのですが、最近、弘前大学の先生が調べられたのです。私と調べた事は違うのですが、ブラックバスが放された池からはカイツブリがいなくなるのはなぜなのだとすることを調べられたのです。カイツブリは小さいものですから、ブラックバスのような大きな魚は食べられない。特にヒナを育てる時はメダカぐらいの大きさのものをあげます。じゃあ、ブラックバスの稚魚をあげていけば同じことではないかと思うのですけれども、そううまくいきません。ブラックバスの稚魚は、冬を越してカイツブリのヒナが生まれる5月、6月くらいになりますと、稚魚が大きくなっていて、カイツブリのヒナにあげられるような大きさではないらしいのです。それで、カイツブリの繁殖ができなくなって、カイツブリがいなくなってくるのだという話をされていました。だから、カイツブリのように小魚を主に食べる鳥が少なくなってきています。特に深刻なのは琵琶湖で、小さな魚を食べる鳥が少なくなってきて、大型の魚を食べる鳥が多くなってきているのです。それは何かと言うと、カワウですとか、大きなアオサギのなどです。

( 鈴 木 )

私、新潟市内で仕事をしているのですけれども、信濃川の下流部、新潟の街中に鶺鴒がいっぱいいますよね、新潟でも鶺鴒飼いができるのではないかとって喜んでいたのでしたのですけれども、決していいことばかりではないのですか。

( 渡 辺 )

カワウは今お話したように、全国的に増えてきているのです。1960年代から70年代ぐらいは、それこそ絶滅危惧種になるのではないかとされたぐらい数が減少しました。その時、新潟県にはほとんどカワウは見られなかったのです。ところが、1980年代に入ってから上野の不忍池ですとか有名な大きなカワウの集団繁殖地が関東や関西の方にあったのですが、そこでの繁殖数が多くなってきた

せいか、よくわかりませんが、とにかく 1980 年代に入ってからカワウが増え始めてきたのです。新潟県の場合は、増加がかなり目立つようになってきたのは 1990 年代だと思います。1980 年に長岡の信濃川で調べた時には、カワウというのは 2 羽、3 羽でしたから。

(鈴木)

今、県庁の裏に行くと、群れを作っています。

(渡辺)

今は群れを作って入ってきておりますので、新潟県も確実に増えてきております。カワウが問題なのは、魚を専門に食べるということです。それこそカワウは大きなアユとかを食べるものですから、琵琶湖でも問題になってきています。魚をどんどん食べるので地域によっては内水面漁業に深刻な問題が出ています。それとサギと同じように集団で繁殖するものですから、糞によって木が枯れるという、この二つの問題でどこでも嫌われて、地域によってはカワウの駆除が行われています。今、新潟県の状況について野鳥愛護会で調査をやっておりますが、そのとりまとめ役を私が仰せつかってやっておりまして、去年 1 年間で新潟県の状況がある程度分かってまいりました。新潟県では夏場は少ないのです。今の時分は、新潟県全体でも 300 から 500 羽以下ではないでしょうか。それが冬になってきますと、一番多い時で 1,500 羽ぐらいです。だから、季節によってカワウの数が変わってくるのです。それからもう一つは、季節によって同じ信濃川でもいる場所が変わってくるということです。夏場の今時分で深刻なのは、魚野川の方に多くなります。あるいは川口町から十日町市の信濃川でも夏多くなります。魚野川のアユの時分にカワウが多くなっていくということで問題ですが、冬になると向こうの方が少なくなりまして、三条だとか新潟市ですとか下流の信濃川や福島潟の方に多くなるのです。今、鈴木さんの方からお話のあった県庁の裏あたりは冬に群れになってくるのです。新潟市から三条までの信濃川下流域は少ないところで、1 年中あまり出てこないところです。中ノ口川には冬になると 200 ぐらいの数が出ていますし、10 月以後、冬になりますと、三条大橋の上流、新幹線との間にテニスコートが左岸の方にありますが、あそこの川辺の 5、6 本の小さいオニグルミの木にカワウが集団でねぐらを作るのです。私もずっと見ていて分からなかったのですが、3 月に行きましたら、木が真っ白くなっていたのです。その時に、カワウがいるのではないかなと思ったので、夕方待っていましたら、案の定、カワウがねぐらに集まって来るのです。180 羽から 200 羽いました。新潟県に冬多くなっていくのは、このような 200 羽ぐらいの規模のねぐらが冬になると転々とできてくるのです。今行っても、三条のところにカワウはいません。おそらく 10 月以後に入ってくるのではないかと思います。

(鈴木)

今は築場にいつているわけですか。

(渡辺)

今は散っているか、あるいはどこか県外に行っているかですね、どちらかと言うと、夏場は川の上流の方に行き、冬になると下流の方に来る。なぜかはよくわかりませんが、魚が捕れなければだめですので、冬は魚野川のようなさらさら流れる浅いところでは魚が少なくなって、深みのある下流の方が多いのかなと思っておりますけれども、新潟県は今そんな状況になっています。

(鈴木)

この十数年で、これまであまり見かけなかった種が増えるというのは、先ほどのカイツブリの話のように、魚類の生態の変化によるものなのですか、それとも気候の温暖化とか、暖冬が続いたとか、原因は何か推測されているのですか。

(渡 辺)

一つ言われているのは、先ほど言いましたように関東や関西の、かつてはカワウの大きなコロニーのあったような場所で増えてきたというのは、一時期よりも水環境がよくなった、あるいは河川の汚染が減少したからではないかといわれています。昭和 30 年代から 40 年代に環境悪化や農薬などによって、水鳥類がぐっと減った時がありますけれども、近年、それが改善されてきたといえますか、水環境がよくなってきたのに伴ってカワウの数が増加してきた。増加したところでは問題が起きてきたから、駆除もされて、追われているものだから、分散して各地に散らばってきて、そして各地に集団繁殖地が出来はじめたのではないかとされています。だから、新潟の方に魚が非常に多くなってきたからカワウが入ってきたというよりも、カワウが仕方なく入ってきたのかもしれない。ただ来てみたら、なるほど信濃川というのは魚も多いし、ということですみついた。すみつくには、すみつだけの魚がなければなりませんし、それだけのものを持っている川だと思いますが。やっぱり信濃川というのは魚が非常に多いのではないかなと思います。オジロワシがいたりカワウがいたり、魚を捕る大形の鳥がこれだけの数いるということは、魚が多いのではないかと思います。

(鈴 木)

ちょっと寒いさえ我慢すれば、外套の 1 枚くらい着れば、こんなにもいいところはないと。環境悪化が原因ではなくて、環境が逆によくなったから個体数が増えて、日本中で拡散しているという。

(渡 辺)

やっぱり魚食性の鳥が多くなっているということは、そうなのでしょうね。

(鈴 木)

今、話の出たオジロワシの話は非常にびっくりしたのですけども、天然記念物ですよ。しかも日本で最大の猛禽類と言われる鳥が、大都市ではないですけども、中都市の真ん中を流れている川にいるというのは、昔からいたのですか。

(渡 辺)

いたのだと思います。気がつかなかったですね。私が最初にオジロワシを見たのは、大河津分水なのです。最初はそれほど大きいとは思いませんで、トビかなと思っていたのですけれども、よく見たら、オジロワシでした。それが最初の出会いです。そして、長岡に行きましたら、長岡の信濃川にも来ていましたが、オジロワシはさっきもちょっと言いましたけれども、魚を食べるワシなのです。ワシの中にも、例えば山の方にいるイヌワシですとかクマタカは、ほとんどウサギを捕ったりヤマドリを捕ったりしている、いわゆる山ワシとされています。ところが、オジロワシは海ワシと言われる仲間です。オオワシですとかオジロワシですとか、あるいはアメリカの国鳥になっているハクトウワシだとか、これらは全部海ワシと言われて、どちらかと言うと魚を捕るワシなのです。長岡のオジロワシを見てみると、餌の 8 割が魚です。あとの 2 割は何かというとカモを捕まえているのです。魚は小さいのでも大きいのでも何でも捕りますけれども、魚を主食にしているのです。そういうのを考えると、オジロワシはカワウほど食べないような気がしますけれども、それでも 11 月に来て 3 月までいます。4 か月間ぐらい、長岡には必ず 2 羽来ています。これはつがいで、毎年同じ夫婦で来ているみたいです。そして、この夫婦の関係は、最近、長岡で研究しておられる人が見て、初めて分かってきたことなのですけれども、毎年同じ夫婦が来て、メスの方が非常に強いのです。猛禽類はみんなそうですけれども、大体メスの方が身体が大きいのです。トビはあまりメスとオスの差がないみたいですけれども、トビはどちらかと言うと死んだり弱っている動物を捕るタカです。そういうタカだとあまりオスとメスで差はないようです。生きているものを捕るイヌワシですとかクマタカですとか、

あるいはオオタカなどは、メスの方が身体がずっと大きいのです。オオタカやハイタカなどは、本当に同じ種類かと思うぐらいに身体の違いが違います。メスの方が非常に大きい。なぜそうなっているかというのはよく分かりませんが、そのほうがバラエティに富んだ動物を捕食できるといわれています。オスは敏捷で小型の獲物も捕れる、メスはどちらかと言うと大型のものを捕るといようなことです。ところが、長岡のオジロワシを見ていると夫婦が一緒の時に、オスの捕った獲物をメスがよく取り上げるのです。特に2月になると、その傾向があります。オジロワシはオスとメスはほとんど離れないで1年中一緒にいて、北の方へ行って繁殖するのですが、冬にこちらに来ている間も夫婦なのです。お互いに夫婦の絆を高めるために、2月くらいになってきますと、オスが捕った魚をメスの方にプレゼントするということがあります。そうばかりではなくて、夫婦関係がうまくいっていないと、オスが捕ればメスがオスをはねのけて魚を横取りするのです。逆にオスの方が取り上げることはほとんどないのです。鳥類にはオスがメスに朝をプレゼントするというのは、繁殖の時によく見られます。コアジサシですとかカワセミなんかもそうです。カワセミも卵を産む前にメスにオスが餌をプレゼントして、それを受け入れることによってつがいになるといわれています。そういうプレゼントはただのプレゼントというよりも、餌をやることによって産卵をするメスに体力をつけさせるという意味もあるのではともいわれています。そういう意味では、オスからの餌のプレゼントというのは大きな意味があります。長岡のオジロワシは蔵王橋から越路橋までの間の10キロメートルを利用しています。2羽の夫婦が一冬過ごすのに長岡の信濃川が10キロ必要なのです。蔵王橋の近くにメスがいて、オスは越路橋の近くにいるということもあるわけです。このような時にオスはメスがいないものだから、この時とばかりに餌を捕るようです。オスは1羽でいる時に餌をいっぱい捕るみたいなのです。

(鈴木)

でも、繁殖は北でやるわけですね、子どものためにたくさん食べさせてあげているわけではない、単なる力関係。

(渡辺)

繁殖はどこでやっているか分かりませんが、日本では知床半島など、北海道の一部です。あとはほとんどもっと北の方に行くわけです。餌の関係はオスとメスとの力関係というより非繁殖期につがいの関係を維持する上で重要なのだと思います。

(鈴木)

信濃川あたりが南限なのですか、もっと南まで。

(渡辺)

もっと南まで行きます。沖縄まで行ったという例もあります。

(鈴木)

ハクチョウが代表的でしょうけれども、様々な渡り鳥が季節によって行ったり来たりしますが、川というのはそういう休憩所にも使われるわけですね。

(渡辺)

渡り鳥の休息地として利用されるということも、また、皆さんに知っておいていただくといいと思うのですが、信濃川に種類が非常に多いというのは、鳥が日常的に使う場所として信濃川や五十嵐川という河川が大きいということなのです。鳥の1年の生活というのはどういう生活かと言うと、今、子育てはほぼ終わりです。繁殖の時期が終わって、これから秋の渡りが始まるわけです。今繁殖しているツバメだとか、あるいはオオルリですとかサンコウチョウなどは夏鳥といわれる鳥で、春に日本

に来て子育てをして、10月くらいになると全部東南アジアに渡るわけです。繁殖のためにエネルギーを使った親鳥、あるいは巣から出たヒナも今は盛んに餌を食べて、秋の渡りに備えるわけです。そして、東南アジアの方へ行って冬を越して、来年の4月くらいになると、日本に帰って来て繁殖するわけです。これが春の渡りです。ところが、ハクチョウは逆で、今、ロシアの方へ行って子育てをしている。子育てが終わって、秋に日本に渡ってくる冬鳥です。このように繁殖地と越冬地の二つの地域を1年に1回往復するのが、いわゆる渡りという現象で、日本の鳥の80%近くは渡り鳥だと言われているのです。だから、大なり小なり鳥は季節によって移動していく。そういう生活の中で繁殖のために信濃川を利用する鳥、長岡の場合ですと約25種類ぐらいいます。

それから、秋になると信濃川を越冬地として利用する冬鳥のカモだとかハクチョウが渡ってきます。その他この時期には渡りの時に休息地として利用する鳥が入ってきます。信濃川で繁殖したホオアカですとか、アオジですとか、これらがほぼ南の方に渡っていく、そこに、例えば北海道から九州まで渡るオオジュリンのような鳥は、新潟県の信濃川などを休息地として利用していくわけです。ここで1週間、2週間休んだりしながら、越冬地である九州まで行くとか、東南アジアまで行くとかという形をとるわけです。そして春になると再び夏鳥が渡ってくる。こういうふうに、春から夏、秋、そして冬をそれぞれ春と秋の渡りをはさんで信濃川を利用するのです。だから、信濃川は1年間を通してみると、80種類も見られますよということになるわけです。

私たちはよく信濃川は、鳥が豊かだという表現をしますが、豊かというのはどういうことかといいますと、一つは季節を追って次から次へと鳥が入れ替わることによって、1年中見られるということです。これが川の特徴で、冬、山の方に行っても鳥はほとんど見られなくなります。さっき話しに出てきました三条の月岡林道に行っても、夏のようなにぎわいはまずありません。山の方は冬になると、数えるぐらいの鳥しか出てこない。しかし、信濃川の方は20種、30種の鳥が冬を越すために入ってきているわけです。

(鈴木)

新潟みたいな雪国では、川の空間というのは、冬の間は鳥にとっても貴重な空間だということなのですか。

(渡辺)

非常に貴重です。特に冬場は貴重です。これは信濃川もそうですけれども、五十嵐川のような川を冬見られたら本当にそうです。こんな鳥がここに来ているのかと思うくらいです。特に雪が降るといのは鳥にとっても大変な危機になるわけです。だから、雪が降ると南へ移動する鳥はたくさんいます。雪が降らなければ、メジロが冬でも残っているという話をよく聞きます。雪の少ない年、雪が降らなければいるということですが、今年のような大雪になると、ほとんど餌がとれないということで鳥が雪のない地方へ移動をする。あるいは近くにいる鳥も、たった一つ、雪の中でも地面が出ているところがあります。それが水辺なのです。したがって雪が降ると五十嵐川のような中河川といいですか都市河川に鳥が多くなる。冬、五十嵐川の下流の方にはタシギがいたり、イカルチドリがいたり、あるいはスズメだとかカラスだとか、水鳥ばかりでなく陸の鳥も雪の消えている中州のところに集まっています。今年驚きましたのは、2月だったか、五十嵐川の上流の中州にクマタカがきました。クマタカというのはそれこそ山の鳥で、国内希少種の一つですが、まさかと思いましたけれども、クマタカが砂利の中州に来ました。そこは常に水が被るものだから雪が消えて石や土が出ているところなんです。そこへ餌をとりにくるのです。何を捕ったか分かりませんが、冬の河川の存在の大きさを実感しました。河川を持っていることによって、冬でも鳥が多く見られるということがあると思

います。三条に五十嵐川がなかったら、冬はほとんど鳥が入ってこないでしょう。

(鈴木)

渡り鳥が多いという話ですけれども、素人考えなのですけれども、例えば本州を横断しようという時に、信濃川沿いに飛んでいけば千曲川へ行って、ちょっと飛ばば天竜川、今回の水害コースで行けば太平洋に出られると、川伝いに飛ぶことはあるのですか。

(渡辺)

おそらく目印みたいな形で飛んでいくことはあるでしょうね。海を越えるというのは鳥も勇気がいるのです。そうすると、どちらかと言うと、海岸沿いにずっと南下した方がいい、あるいは北上した方がいいというのはあると思うのです。陸の見えるところに行く。内陸の方でも河川沿いに移動するということはあると思います。海を渡る時の鳥を見ますと、非常に勇気がいるという感じがするのですが、春の渡りの時に粟島の一番北に行ってみますと、これからいよいよ北へ渡るというヒヨドリが何千と集まってくるのです。島から一步出ると、ずっと向こうは、大海原が広がっているわけですから、どこに行くか分かりませんけれども、とにかく次の陸のところまで行かなければなりません。見ていると海に出るときに、みんなが一気に出ていくのではないのです。出ていったと思ったら引き返し、出て行っては引き返し、何回もやり直します。海の上に出ていくというのは渡り鳥でも勇気がいることなのです。それを待ちかまえているのがいまして、ヒヨドリが海の方にいよいよ渡るぞいう時に、ハヤブサが群れの中に突っ込んできます。ハヤブサはそれをねらっているわけです。ハヤブサがいたから引き返すのではなくて、ハヤブサが来ない時でも何回も何回も思い直して、引き返しを繰り返している。そして、いよいよ行ったという時は、見えなくなるくらいまで遠ざかって行きます。また、船に乗っていると、船の上に小鳥が下りてくることがあります。岩船港から粟島へ行く間、あるいは佐渡汽船でも、わずか、あのぐらいの間でも疲れて舞い降りる小鳥がいます。毎年、渡るルートみたいなものはあるのだと思います。おそらく信濃川に来る鳥は同じものが毎年、渡っているのではないかなと思います。私は標識調査という仕事を信濃川でやっておりますけれども、毎年10月上旬から11月上旬まで、環境省の仕事ですけれども、鳥を捕まえてリングをつけて、また放してやるという仕事です。毎年2,000羽くらい放鳥しています。今は大河津分水でやっていますが、前は長岡でやっていました。それをやっていると、北海道でリングをつけられた鳥が信濃川に来て、私が捕まえて足を見たらリングがはまっている。そのリングはどこではめたものかは、山階鳥類研究所に問い合わせるとすぐ分かるようになっていっているのです。リングをはめたのは北海道のどこどこで、だれがはめましたというのが分かるようになっていっているのです。そのような記録を見ますと、北海道で放鳥された鳥が、信濃川の河川敷に非常に多く入ってきます。アオジですとかオオジュリン、カシラダカというのが圧倒的に多いですけれども、この仲間ほとんど北海道で放鳥されています。そして、大河津分水や長岡を通過した鳥は、長野県で捕まったり、あるいはもっと南の愛知県や四国などで回収されています。それからオオジュリンというのは割合に回収が多い鳥です。それはなぜかと言うと、ヨシ原を伝っていくからです。渡り時にはヨシ原からヨシ原を使いながら行くわけです。そうすると、北海道のヨシ原で標識されたオオジュリンが、新潟のヨシ原に渡って来るといわけです。青森で放されたのも多い。最後は越冬地である北九州のヨシ原で多く捕まっています。それで、北九州の方からよく電話が来ます。渡辺さんがそちらの方で放されたそうですが、何月何日に放したのでしょうかという電話が来ます。そうすると、なるほどな、鳥の秋の渡りというのはまちがいに北から南へ向かって渡って行って、北九州が越冬地なのだなと実感します。新潟を通過している時に信濃川で休んでいくのだなというのが分かります。

(鈴木)

九州に行くのは日本海沿いかもしれないし、愛知とかへ行くのは信濃川から長野経由で、川伝いに  
行っているという、いろいろな形の鳥が行き来する十字路でもあるということだと思います。

あと、先生がやられているので、先ほどからちらちらと話が出てきましたし、写真にもあったので  
すが、ムクドリとゴイサギが街中で生息して、いろいろな問題を起こしていた鳥のコロニーを信濃川  
の方向へ向けて移動させたという取組も成功されて、先進的な取組として有名だとお聞きしているの  
ですけれども、少しご紹介いただけますか。

(渡辺)

今、話に出ましたムクドリとサギの移動は若干状況が違いますが、サギの方の話をしようと思いま  
す。ご存じだと思いますけれども、長岡の悠久山には50年の歴史を持ったサギの集団繁殖地があり  
ました。新潟県では最も古い繁殖地です。昭和25年くらいに入ってきたのではないのでしょうか。戦  
後の食糧難の時に木に登りついて、サギの卵を取ったり、サギのヒナを取ったりして食べたというの  
は昭和25、6年頃の話でよく聞きますから。その時分はそんなにサギはいっぱいいなかったのだし  
ょうけれども、悠久山に蒼紫神社という由緒ある神社がありますが、そこで詠まれた短歌に、瑞鳥が  
悠久山に来て非常にめでたいという内容のものがあり、その時分に大きなアオサギが入ってきたのだ  
と思うのです。そういうことから見ますと、約50年間続いてきたサギの集団繁殖地です。

昭和51年に初めて悠久山に行ってみました。博物館に入って何を研究しようかなと思っていた時  
に、ある新聞社の方に悠久山にはサギは何羽いるのですかと聞かれた時に、何も答えられないわけ  
です。500羽ぐらいじゃないですか、みたいな話をしていたような記憶があります。それで、一つ調べ  
てみようということで、悠久山のサギを調べ始めたのです。サギの数をどうやって調べるかというの  
が一つのポイントになりますけれども、サギを1羽、2羽と数えるのは大変な話ですので、巣の数を  
数えたのです。悠久山のサギがいくつ巣を作るか巣を数えようと思ひまして、杉の木の1本1本に番  
号をふりました。この前、悠久山に行ってみたら、赤いペンキで書いた札がまだ残っているのがあり  
ました。全部で450本くらいあったのですが、1本1本に抱きつきながら、水系で結んだのを覚えて  
います。そうやって、毎年、1番の木にはアオサギの巣が何個、ゴイサギの巣が何個、という方法で  
やってきました。私が調査を始めた昭和51年には、ゴイサギの巣が約1,000個、アオサギの巣が約150  
個くらいでした。巣が1,000個ということはオスとメスがいますから約2,000羽、また、アオ  
サギを入れると2,300羽から3,000羽規模のコロニーかなということ。こうやって17年くらい毎  
年調査しました。悠久山は繁殖するコロニーですので、アオサギはゴイサギよりちょっと早いですが、  
2月下旬になると悠久山に帰ってきて、子育てが終わる7月には悠久山からいなくなるのです。だか  
ら、サギの繁殖が終わった8月から7か月間くらいは悠久山からサギの声が全くしないのです。とこ  
ろが、3月になって帰ってきますと、もう大騒ぎの状態が始まります。450本くらいの木しかない中  
に1,000、2,000の巣があるわけですので、当然1本の木に何個も巣があるわけ。気に入った木だ  
と30個くらい巣がある。鈴なりみたいな形で巣が作られます。

そういう形になっていきますと、杉の木も枯れてきます。あの杉も由緒あるもので、長岡藩の牧野  
の殿様の3代目の時分に植えられた杉だと言いますから、約250年くらい立っているのです。長岡で  
は「蒼紫の杜」と言われて市民に親しまれ、悠久山も「お山」といって市民の憩いの場でした。そこ  
の木がどんどん枯れ始めてきているというのが心配の種でした。また近くには悠久山球場もあります  
し、家もいっぱい建ってきています。その住民の人たちに非常に影響が出始めてきたのです。私が行  
った昭和51年頃は1,000個くらいの巣があっても、杉林の真ん中くらいに巣が多かったものだから、

あまり周りに影響はなかったのです。ただ、ポツポツと耳に入ってきたので、私がいる間にこのサギを何とかしてくれ、追い出してくれ、というような話がなければいいがなと思いながら毎年巣を調べていました。しかし、巣はどんどん増えてきまして、これはもうだめだということで、いよいよ 1989 年にサギの追い出し作戦をやることになりました。そのころにはゴイサギの巣が 1,000 だったのが、2,000 になったのです。ちょうど倍に増えました。そして、アオサギの巣が 150 だったのが 250 になった。そこに今度はコサギという白いサギも入ってきて、ダイサギ、シラサギと全部で 6 種類のサギが入ってきたのです。コサギの巣は 60 くらいだったのです。毎年調べているものですから、ついでに木の枯れ具合も調べていました。今までサギが巣を作らなかった木は青々していますが、サギが巣を作り始めますと、3 年ぐらいで杉の木が枯れ始めるのです。前は 10 年かかって枯れたのが、後半になってきますと、林全体の活力が弱まってくるのでしょ、5 年ぐらいで枯れてくるのです。今行ってみますと、ここがそうだったのかと思うぐらい、杉林がなくなっています。私がサギの追い出しをやる時には、枯れていない杉の木は 100 本くらいになっていました。枯れないと言っても、これから枯れるだろうと思うようなものも入れましてそのぐらいの程度で、あとはほとんど枯れていました。そんな状況になってきたのです。

その住民でない方は、サギの方が先に来ている、そこに後から家を建てたのだから我慢しろみたいな話が出たり、サギがかわいそうだからという話もありました。確かに自然保護も大事だし、鳥も保護しなければならない。それでも近隣住民の方々は 10 年も前から市へ何とかしてくれと毎年陳情をしてきたのです。住民からしてみれば、ただうるさいとかだけではなくて、サギの巣は目皿みたいに木の枝を組み合わせたもので、サギは水っぽい糞をしますので、それが霧状になり、悠久山は非常に高い木の上に巣を作っていますので、風に乗って降り、木は真っ白になるし、周りの住宅の洗濯物にもかかってしまいます。巣そのものは 2,500 個くらいですけれども、6 月くらいになるとヒナが一つの巣から 3 羽くらいずつ出てくるわけです。そうすると、6,000 ~ 7,000 羽のヒナが出てくる。親は 5,000 羽くらい、10,000 羽以上からのサギがわずか 2 ヘクタール、450 本くらいの杉林の中にいるわけです。ヒナが成長してくるにつれて、羽もだんだん伸びてきます。鳥の羽が伸びてくる時というのは、ちょうど筆の先みたいになって鞘が被っていて、その鞘がポロポロとフケみたいになって取れて、そこから羽が出てくるのです。6,000 羽のヒナからみんなパラパラと取れてくるわけですので、それが梅雨時に風で飛びまして窓を開けておけば室に入ってくる。閉じてもガラス窓にくっつくわけです。さらに彼らの主食は魚ですが、例えば私がサギの調査に入りますと、抵抗する手段もないですから、興奮して飲み込んだ魚を吐き出すのです。糞は大したことないですけれども、あれがかかった時は、臭いだけでも大変です。二日酔いの時のサギの調査は大変なものでした。そのぐらいにすごい臭いが 6 月の梅雨時にするわけです。蒼紫の社は大変な状態になっていて、いよいよ移動させなければならないと思いましたし、市も本腰を入れました。

そして、移動作戦としてやったのが 1989 年の春です。鉄砲で撃ったりするのはだめだということで、どういうやり方がいいかを検討しました。それまで野鳥の会の反対もあったりして、千葉だとか埼玉ですとかでは、サギコロニー全滅というのが新聞記事によく出ていたものです。地域の住民もが何もしてくれない市町村に業を煮やして、自分たちで巣を落としたり、ヒナを殺したりということがありました。だから、前例には鳥を守りながら解決したものが一つもありませんでした。悠久山の場合には、サギが入ってきた時に移す、つまり産卵する前にという作戦でした。移すと言ったってどこに移すのだということになります。その解決策は信濃川の懐の深さでした。先ほど、信濃川のサギのコロニーの話をしていただきましたが、悠久山から追い払えば、必ず信濃川に移るなというのが

ある程度私の頭の中にありました。今日みたいに信濃川に大きな水が出た時に、信濃川のサギのコロニーが全部やられることがあるのです。そういう年は悠久山の方にサギの数が増えるのです。おそらく信濃川と悠久山の間にはサギの交流があると思っていました。それで、ただ、追い出すのではなく、信濃川に移動させるのだということで、当時は、追い出し作戦とは言いません、移動作戦と言いました。

ただ、問題はまだありました。ゴイサギは信濃川に移動するという確信はあった。それは信濃川にゴイサギのコロニーがあったから。ところが、250 巣を作っている大型のアオサギについてはどうなるか確証がなかった。信濃川はまずだめだなと思いました。アオサギはどちらかと言うと、巣を高い杉の木に作るのです。だから、追ったけれども、神社の前の杉林に移ったり、民家の杉林に行ったら何もならない。アオサギだけはどこへ行くのか確信がなかったのです。それで、アオサギは残して、ゴイサギだけを移動させようという作戦をとりました。同じ1本の木に巣を作って一緒にいるのに、ゴイサギだけ追い払って、アオサギだけ残すというのはどういうことだろうと、思われると思いますが、手前味噌で恐縮ですが、十何年間ずっと調査をしてきたデータがここで生きてきました。それは、アオサギは悠久山に2月下旬に入ってきます。ゴイサギの方は3月になってから入ってきます。つまり、3月の中旬から下旬、悠久山に来るのが約1か月くらい遅いのです。巣を作るのも1か月くらい違う。それで、ゴイサギが入ってきた時分には、アオサギはもう巣を作って卵を産んでいる。いったん卵を産んで卵を抱き始めますと、巣に執着心がでてきて、追ってもなかなか出ていかないのではないかなと思ったのです。アオサギが卵を産んで温めていて、ゴイサギがこれから巣作りに入ってきた時をねらって追い出すという作戦を立てました。

もう一つは、2ヘクタールくらいある林の真ん中にアオサギの巣が多いのです。スギ林は真ん中の木から枯れはじめていました。しかし、アオサギは枯れた木でも巣を作るのです。大型ですので、葉っぱが茂った木よりもスカスカとした方が都合がいいようで枯れ木のてっぺんに大きな巣を作っているのです。したがって、林の真ん中くらいにアオサギの巣が多かったのです。ゴイサギは枯れ木は好まないで葉っぱがいっぱいのところがいいので、周りの木にゴイサギの巣がいっぱいあったのです。一つは巣づくりの1か月の違いを利用すること、もう一つは林の周りのゴイサギを全部出すという作戦に出たのです。ところが、焦りといいますか、アオサギだけいなくなって、ゴイサギだけいたらどうしようか、みたいな考えが頭の中にちらちらとしまして、ちょっとまずかったですけれども、3月まで待ちきれなかったのです。ゴイサギがちょっと来始めたという3月上旬に試しにやってみたのです。何をやったかと言うと、林の中に目玉風船をあげたり、手元の写真にも載っていますが、旗印を木の上に立てるなど、大がかりなものでした。3月上旬にやりましたら、その時にいたアオサギの方が全部林を出たのです。ところが、ゴイサギはまだほとんど入ってきていなかった。アオサギが巣をそのままにして出てしまったのです。失敗したと思いました。それで、アオサギは1週間帰って来なかったです。どこにいたかと思いましたが、悠久山の周りの田んぼのところに、4日目か5日目くらいになりましたら群れで田んぼにずっといるのです。彼らだって入って来たくてしょうがない。そして、1週間たって入ってきました。目玉風船などお構いなしにみんな戻ってきた。それを見た時に、いよいよこれから本番のゴイサギが来るが、あまり効き目がないなという予感がしました。案の定、ゴイサギが3月中旬くらいにどんどんお構いなしに入り始めたのです。そして、3月の下旬になった時、ゴイサギが3,000羽くらい入ってきました。入ってきてすぐ巣を作り始めるかということ、まだ作らないのです。その時分から目玉風船が上がっていても、あまり効果がないということがわかりました。その時分にはテレビだとか新聞にもサギを追い出しするのは何ごとだという記事もありましたし、

社会的な問題にもなっていました。そういう中で、私は黙って一人、仕事が終わった後の夕方、コロニーの中に入って追い出しをやったのです。なぜ夕方かと言うと、昼間もやってみたのですけれども、飛び立つのですが、4,000 も 5,000 もいるサギが一斉に飛び立つものですから、周りの人は何だと思うし、ゴイサギは夜行性のため、私がいなくなると、また全部帰ってくるのです。そこで夕方の活動しはじめる時分に追い出す方がいいなと気がつきまして、5時に仕事が終わってからコロニー行って追うようにしたのです。よく覚えています、4月の5日か6日だったと思います。いつものように夕方追っていたのですが、少し暗くなりかけた悠久山から 100、200 の単位でゴイサギが信濃川の方に向かったのです。空が夕焼けで染まっているような時間でした。悠久山から急いで車に乗って信濃川へ行って見たのです。ちょっと暗くなっていましたけれども、ゴイサギが河川敷の柳の木にバラバラと下りているのが見えたのです。それを見た時に、成功したなと思いました。悠久山からサギが全部きてくれるなと思いました。翌日、信濃川へ行ってみたら、ほとんどのサギが信濃川に移っていました。お手元にワサワサ飛んでいるような写真がありますけれども、移って来てすぐ枝をくわえたりして、とにかくこれから卵を産まなければならないという、時期的にもせっぱ詰まった状況なのです。私が悠久山で追っている時もちょっとかわいそうなのです。50年も自分たちが毎年やってきて子育てしてきた悠久山を離れるというのはなかなか大変なことだと思うのです。繁殖期のほんの一時期だけ、卵を産むちょっと前、ゴイサギの足が赤くなります。顔のところに赤も出てきます。卵を産んでしまうと、その色がなくなってしまうのです。足を赤くしたゴイサギが信濃川に 4,000 羽近くが移ってきて、その年は信濃川の中で誰に邪魔されることなく、無事に繁殖を終わったのです。市民の皆さんも、サギが 4,000 羽も来て子育てをしたことなんて誰も分かりませんでした。その年の悠久山は静かな状況でした。ところが、300 羽から 400 羽、来なかったのがいました。今思いますと、移ってくれた 4,000 羽のサギよりも、最後まで残って人間に抵抗したそちらの方を思い出しますけれども、サギの方から見ると、極めて身勝手な人間本意のふるまいに最後まで抵抗したのだと思います。この移動作戦は、いろいろな意味で、私が鳥に関係する仕事をしていく上で非常に大きなことでした。成功した云々というよりも、私自身にはいろいろなことを教えてくれた大きな経験でした。

(鈴木)

サギの方も先生の粘りに負けて、何とかしてやろうかと思ったのかもかもしれません。今の話の教訓は、自然を守ると言っても、それだけで守れるのではなくて、人間がある程度関与しないと、人間との共生の中で自然を大切にしていくということが求められる局面があるということ。人間がかかわる時にはきちんとしたデータ、知識があって、初めてうまくいく。それを無理矢理殺したり、木を切り開くとかしないで、相手の習性とかそれまでの知識の集約があって、初めてそういう共生の道がうまく開ける。もう一つは、信濃川がそれだけのものを受け入れるキャパシティがあったということが成功したのだらうと思います。ムクドリの話を書く時間がなくなったのですけれども、ムクドリを長岡駅前から移動させるにあたっては、先生が作られたムクドリの鳴き声のテープがあるそうで、これが全国に出回っているというお話も伺いましたけれども、いろいろな工夫を相手の習性を知りながらやることで、お互いに譲り合う人間と自然の関係というのを作れるというお話だったと思います。そういう試みが、これから川との関係で求められると思っています。

時間がきているのですが、少し時間を延ばして、皆さんから一、二、せっかくですので、先生に何かお聞きになりたいことがあれば、お話をお受けしたいと思っておりますけれども、いかがでしょうか。特によろしいですか。

では、先生、私はこの信濃川自由大学に何回か来ていて、いつも思うのですけれども、専門の方の

お話を聞くというのは非常に楽しいことで、我々はいつも決まり切った理屈でものを書いたり、言ったりしがちですけれども、本当に現場に立っておられる方のお話は具体的でおもしろいなと思います。

あと、私は自然科学のことは言えないので、少し鳥と文化のかかわりだけで一言、何か触れてみるとすれば、川端康成のノーベル賞の受賞の言葉もそうでしたけれども、「花鳥風月」という言葉があります。これは日本の美しい文化の象徴としての四つが挙げられています。これに雪が加わると、なぜかしら鳥と風がどこかへいってしまって「雪月花」になってしまいますけれども、あれは単に美しいというだけではなくて、四つの共通項は変化するということですよ。花は散るし、月は満ち欠けするし、風は過ぎ去っていくし、鳥は春来て冬去るとか、いろいろな形で来てまた去っていく、そういう変化していくもの、そのうつろいを美しいと見るというのが日本の文化だと思うのです。西洋のゴシック建築みたいなものではなくて変化していくうつろい。私たちはその中に川も入れていいのかなと、大地と海という絶対的な存在の間を変化しながらつないでいくという、存在として川があるのではないかという気がします。かつて、元々変化する川を一つのものに閉じこめようと言うのが河川行政だったのが、10年前の河川法の大改正以降、あるがままの変化するものとして受け止めようという、日本人の文化的な見方に近いような行政にシフトしようとしているのかなと。そういった意味では仲間である鳥は、うつろいやすい多様性を持つ環境の中で、非常に多様な生活をしている、特に信濃川の場合は先ほどの先生の話で、多様な使い方をされている、広場のような、都会のような場だというお話がありましたけれども、その鳥を観察していくことで川の多様性を考える方向に導かれる。鳥は昔からヤタガラスとか物事を導いていくものの象徴としてよく語られますけれども、そういった形で鳥と川の関係をお話を機会に、これからも見詰めていけたらいいなという感じがしました。どうも長時間にわたって、ありがとうございました。少し時間をオーバーしてしまいましたが、皆さんどうもありがとうございました。

(司 会)

渡辺先生、鈴木編集委員、本当にありがとうございました。皆様、今一度、お二人に盛大な拍手をお送りくださいませ。

以上をもちまして「われら信濃川を愛する『信濃川自由大学』第10回講座を終了いたします。本日は長時間にわたりご参加いただきまして、誠にありがとうございました。お帰りの際にはお忘れもののないようお気をつけください。

また、会場を出られる際は混雑いたしますので、どうぞお足元にお気をつけください。皆様にお配りしたアンケートは是非、ご記入いただき、受付のアンケート回収箱にお入れください。ご協力をお願いいたします。本日はご来場、本当にありがとうございました。